

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B2)

(11) 特許番号

特許第5182811号

(P5182811)

(45) 発行日 平成25年4月17日 (2013. 4. 17)

(24) 登録日 平成25年1月25日 (2013. 1. 25)

(51) Int. Cl.

F 1

B 6 5 D 51/18 (2006. 01)

B 6 5 D 51/18

B

B 6 5 D 47/12 (2006. 01)

B 6 5 D 47/12

請求項の数 3 (全 9 頁)

(21) 出願番号 特願2008-222214 (P2008-222214)
 (22) 出願日 平成20年8月29日 (2008. 8. 29)
 (65) 公開番号 特開2010-52810 (P2010-52810A)
 (43) 公開日 平成22年3月11日 (2010. 3. 11)
 審査請求日 平成23年2月25日 (2011. 2. 25)

(73) 特許権者 000006909
 株式会社吉野工業所
 東京都江東区大島 3 丁目 2 番 6 号
 (74) 代理人 100113169
 弁理士 今岡 憲
 (72) 発明者 篠崎 夏夫
 東京都江東区大島 3 の 2 の 6 株式会社吉
 野工業所内
 (72) 発明者 宮入 圭介
 東京都江東区大島 3 の 2 の 6 株式会社吉
 野工業所内
 審査官 柳本 幸雄

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 蓋付き容器

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

胴部 (2) 上端から口頸部 (5) を起立した容器 (1) と、
 口頸部 (5) 外周に嵌合させる外筒 (11) 上端より延設した第 1 内向きフランジ (13) 内周に、下部を口頸部 (5) 内周上部に嵌合する内筒 (14) を貫設し、内筒 (14) 上端より第 2 内向きフランジ (16) を介して注出筒 (17) を起立した中栓 (10) と、

注出筒 (17) の上部内面へ嵌合させる有底の周壁 (21) 上端より注出筒 (17) 上面へ載置させる外向きフランジ (23) を延設し、周壁 (21) 内面に凹溝形態の第 1 係合部 (22) を周設した移行栓 (20) と、

天面 (31) 周縁部より、内周下端部を中栓 (10) の内筒 (14) 外周上部に螺合させる内筒 (32) と、外筒 (33) との、内外二重筒を垂設し、天面 (31) 中央部から、移行栓 (20) の周壁 (21) 内周に嵌合し、且つ、外周に第 1 係合部 (22) と係合する凸部形態の第 2 係合部 (36) を周設した嵌合筒 (35) を垂設したオーバーキャップ (30) とを備え、

移行栓 (20) を注出筒 (17) に嵌着させた中栓 (10) を容器 (1) の口頸部 (5) に打栓し、オーバーキャップ (30) を中栓 (10) へ螺着させることで、第 1 係合部 (22) と第 2 係合部 (36) とを係合させて、嵌合筒 (35) を移行栓 (20) へ嵌合させ、オーバーキャップ (30) を螺脱させることによる開封時に、移行栓 (20) はオーバーキャップ (30) へ移行可能に設けたことを特徴とする蓋付き容器。

10

20

【請求項 2】

胴部（2）上端から口頸部（5）を起立した容器（1）と、
口頸部（5）外周に嵌合させる外筒（11）上端より延設した第1内向きフランジ（13）内周に、下部を口頸部（5）内周上部に嵌合する内筒（14）を貫設し、内筒（14）上端より第2内向きフランジ（16）を介して注出筒（17）を起立した中栓（10）と、

注出筒（17）の上部内面へ嵌合させる有底の周壁（21）上端より注出筒（17）上面へ載置させる外向きフランジ（40）を延設し、外向きフランジ（40）外周面に係合突部形態の第1係合部（41）を周設した移行栓（20）と、

天面（31）周縁部より、内周下端部を中栓（10）の内筒（14）外周上部に螺合させる内筒（32）と、外筒（33）との、内外二重筒を垂設し、天面（31）中央部から、移行栓（20）の外向きフランジ（40）外周に嵌合し、且つ、下部内面に第1係合部（41）と係合する係合突部形態の第2係合部（43）を周設した嵌合筒（42）を垂設したオーバーキャップ（30）とを備え、

移行栓（20）を注出筒（17）に嵌着させた中栓（10）を容器（1）の口頸部（5）に打栓し、オーバーキャップ（30）を中栓（10）へ螺着させることで、第1係合部（41）と第2係合部（43）とを係合させて、嵌合筒（42）を移行栓（20）へ嵌合させ、オーバーキャップ（30）を螺脱させることによる開封時に、移行栓（20）はオーバーキャップ（30）へ移行可能に設けたことを特徴とする蓋付き容器。

【請求項 3】

胴部（102）上端から口頸部（106）を起立した容器（101）と、

口頸部（106）外周に嵌合させる外筒（111）上端より延設した内向きフランジ（113）の内外中間部から口頸部（106）内周上部に嵌合する内筒（114）を垂設し、内向きフランジ（113）の内周から注出筒（115）を起立した中栓（110）と、

注出筒（115）の上部外面へ嵌合させる有頂の周壁（121）の上部外面に第3嵌合部（123）を周設した移行栓（120）と、

天面（131）の中央部より、移行栓（120）の周壁（121）外面へ嵌合し、且つ、内面に第3嵌合部（123）と係合する第4嵌合部（135）を周設した嵌合筒（134）を垂設したオーバーキャップ（130）とを備え、

移行栓（120）を注出筒（115）に嵌着させた中栓（110）を容器（101）の口頸部（106）に打栓し、オーバーキャップ（130）を螺着させることで、第3嵌合部（123）と第4嵌合部（135）とを係合させて、嵌合筒（134）を移行栓（120）へ嵌合させ、オーバーキャップ（130）を螺脱させることによる開封時に、移行栓（120）はオーバーキャップ（130）へ移行可能に設けたことを特徴とする蓋付き容器。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、蓋付き容器に関する。

【背景技術】

【0002】

中栓は通常容器体の口頸部へ打栓によって嵌合されるが、打栓時に、容器体内へ充填された液体が飛び跳ねて中栓の注出口から飛び出るため、これを防止すべく打栓前に注出口を閉塞することが行われている。閉塞の手段としては、例えば、図3に示すように、容器体200の口頸部201へ中栓202を打栓する前に、中栓の注出筒203へ内キャップ204を螺合させておき、出荷時にオーバーキャップ205を容器体200へ嵌合させたもの、あるいは容器体口頸部内へ嵌合させた中栓の周壁下端を押圧破断可能な閉塞板で閉塞するものが知られている（特許文献1）。

【特許文献1】特開2006-306414号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0003】

しかしながら中栓の注出筒203へ内キャップ204を螺合させる前者では、容器内へ充填された液体を注出させる際に、まず容器体口頸部からオーバーキャップ205を取り外した後、中栓から内キャップ204を取り外す必要があり、また注出が終わると内キャップを閉蓋した後、オーバーキャップを閉蓋する必要があり、このように液体の注出時および注出終了時にオーバーキャップ205と内キャップ204との両方を開蓋ないし閉蓋する必要があり、したがって液体の注出が面倒なものとなっていた。また、特許文献1記載の発明では、容器体口頸部外面へ螺合させたキャップの注出筒下端を閉塞板の破断手段として用い、開封時に、キャップを下降させて注出筒下端で閉塞板を押圧破断するようにしているため、開封後の通常使用時にキャップ注出筒を閉蓋するためのヒンジ付き蓋が必要となり、したがって構成が複雑化する傾向があった。

10

【0004】

本発明の目的は、簡素な構成で打栓時における中栓注出口からの液体の飛跳ねを防止するとともに、オーバーキャップの装着時に中栓注出口の閉蓋が、また、オーバーキャップの離脱時に中栓注出口の開蓋が、それぞれ同時に行える容器中栓、容器蓋と蓋付き容器の製造方法を提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【0005】

本発明は、胴部2上端から口頸部5を起立した容器1と、

20

口頸部5外周に嵌合させる外筒11上端より延設した第1内向きフランジ13内周に、下部を口頸部5内周上部に嵌合する内筒14を貫設し、内筒14上端より第2内向きフランジ16を介して注出筒17を起立した中栓10と、

注出筒17の上部内面へ嵌合させる有底の周壁21上端より注出筒17上面へ載置させる外向きフランジ23を延設し、周壁21内面に凹溝形態の第1係合部22を周設した移行栓20と、

天面31周縁部より、内周下端部を中栓10の内筒14外周上部に螺合させる内筒32と、外筒33との、内外二重筒を垂設し、天面31中央部から、移行栓20の周壁21内周に嵌合し、且つ、外周に第1係合部22と係合する凸部形態の第2係合部36を周設した嵌合筒35を垂設したオーバーキャップ30とを備え、

30

移行栓20を注出筒17に嵌着させた中栓10を容器1の口頸部5に打栓し、オーバーキャップ30を中栓10へ螺着させることで、第1係合部22と第2係合部36とを係合させて、嵌合筒35を移行栓20へ嵌合させ、オーバーキャップ30を螺脱させることによる開封時に、移行栓20はオーバーキャップ30へ移行可能に設けたことを特徴とする。

【0006】

また、本発明は、胴部2上端から口頸部5を起立した容器1と、

口頸部5外周に嵌合させる外筒11上端より延設した第1内向きフランジ13内周に、下部を口頸部5内周上部に嵌合する内筒14を貫設し、内筒14上端より第2内向きフランジ16を介して注出筒17を起立した中栓10と、

40

注出筒17の上部内面へ嵌合させる有底の周壁21上端より注出筒17上面へ載置させる外向きフランジ40を延設し、外向きフランジ40外周面に係合突部形態の第1係合部41を周設した移行栓20と、

天面31周縁部より、内周下端部を中栓10の内筒14外周上部に螺合させる内筒32と、外筒33との、内外二重筒を垂設し、天面31中央部から、移行栓20の外向きフランジ40外周に嵌合し、且つ、下部内面に第1係合部41と係合する係合突部形態の第2係合部43を周設した嵌合筒42を垂設したオーバーキャップ30とを備え、

移行栓20を注出筒17に嵌着させた中栓10を容器1の口頸部5に打栓し、オーバーキャップ30を中栓10へ螺着させることで、第1係合部41と第2係合部43とを係合させて、嵌合筒42を移行栓20へ嵌合させ、オーバーキャップ30を螺脱させることに

50

よる開封時に、移行栓 20 はオーバーキャップ 30 へ移行可能に設けたことを特徴とする。

【0007】

さらに、本発明は、胴部 102 上端から口頸部 106 を起立した容器 101 と、
口頸部 106 外周に嵌合させる外筒 111 上端より延設した内向きフランジ 113 の内外中間部から口頸部 106 内周上部に嵌合する内筒 114 を垂設し、内向きフランジ 113 の内周から注出筒 115 を起立した中栓 110 と、

注出筒 115 の上部外面へ嵌合させる有頂の周壁 121 の上部外面に第 3 嵌合部 123 を周設した移行栓 120 と、

天面 131 の中央部より、移行栓 120 の周壁 121 外面へ嵌合し、且つ、内面に第 3 嵌合部 123 と係合する第 4 嵌合部 135 を周設した嵌合筒 134 を垂設したオーバーキャップ 130 とを備え、

移行栓 120 を注出筒 115 に嵌着させた中栓 110 を容器 101 の口頸部 106 に打栓し、オーバーキャップ 130 を螺着させることで、第 3 嵌合部 123 と第 4 嵌合部 135 とを係合させて、嵌合筒 134 を移行栓 120 へ嵌合させ、オーバーキャップ 130 を螺脱させることによる開封時に、移行栓 120 はオーバーキャップ 130 へ移行可能に設けたことを特徴とする。

【発明の効果】

【0012】

本発明は、注出口を閉塞させた状態で中栓を容器口部へ打栓するので、打栓時に、容器内に充填された液体が中栓注出口から飛び跳ねることがない。

【0013】

また、本発明は、オーバーキャップ等の他部材へ移行可能な移行栓で中栓の注出口を閉塞するため、開封時はもちろんのこと開封後においても、オーバーキャップ等を容器から離脱させることで同時に中栓注出口を開蓋でき、またオーバーキャップ等を容器へ装着させることで同時に中栓注出口を閉蓋でき、したがって注出時の容器の開蓋と注出終了時の容器の閉蓋とをそれぞれ一回の操作で行うことができる。

【0014】

さらに、本発明は、中栓の注出口へ移行栓を嵌合させるだけで打栓時における液体の跳ね出しを防止できるとともに、開封時に、液体飛び出し防止用としての移行栓をオーバーキャップ等の他部材へ移行させて通常使用時における中栓注出口の栓として使用することができるため、構成を簡素にすることができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【0015】

以下、本発明を、図面に示す実施の形態を参照しながら説明する。

1 は容器で、胴部 2 の上部外面に第 1 突条 3 が周設されている。また胴部 2 上端から肩部 4 を介して口頸部 5 が起立している。口頸部 5 外面に第 2 突条 6 が周設されており、第 2 突条 6 よりも上方の口頸部部分外面に第 3 突条 7 が周設されている。

【0016】

10 は中栓で、第 2 突条 6 よりも上方の口頸部 5 部分外面へ嵌合させた外筒 11 下端内面には段部 12 が周設されており、段部 12 は第 3 突条 7 下面へ嵌合している。

【0017】

外筒 11 上端には第 1 内向きフランジ 13 が付設されており、第 1 内向きフランジ 13 内周には内筒 14 が貫設されている。内筒 14 下部は口頸部 5 上部内面へ当接されており、また内筒 14 上部外面には雄ネジ 15 が形成されている。

【0018】

内筒 14 上端から第 2 内向きフランジ 16 を介して注出口を構成する注出筒 17 が起立している。このようにして構成された中栓 10 は打栓により口頸部 5 へ嵌合される。その際、段部 12 は第 3 突条 7 を強制乗越えしてその下面へ嵌合する。

【0019】

10

20

30

40

50

20は移行栓で、注出筒17の上部内面へ嵌合させた有底周壁21上端に、注出筒17上面へ載置させて外向きフランジ23を付設している。周壁21内周面には第1係合部22を構成する凹部からなる溝が周設されている。また周壁21上部外面は大外径部に形成され、大外径部が注出筒17上部内面へ密着している。

【0020】

30はオーバーキャップで、天面31の周縁部から高さが異なる内外二重筒32、33を垂下して、外筒33下端を第1突条3へ載置させるとともに、内筒32内面に形成された雌ネジ34を雄ネジ15へ螺合させている。

【0021】

天面31中央部から移行栓周壁21内へ嵌合させて下面開口の嵌合筒35が垂下されている。嵌合筒35外周面には第1係合部22と係合する凸部から構成される第2係合部36が周設されている。

10

【0022】

次に作用について説明する。

容器1へ打栓する前に、中栓10の注出筒17へ移行栓20を嵌合させて容器中栓を形成する。こうして得られた容器中栓を液体が充填された容器の口頸部5へ打栓する。

【0023】

中栓の注出筒17は移行栓20により閉塞されているから、打栓時に容器が振動して容器内の液体が跳ね上がっても注出筒17の注出口から飛び出ることがない。打栓後、オーバーキャップ30を容器へ嵌合させる。

20

【0024】

その際、天面31から垂下する嵌合筒35が移行栓20内へ嵌合されると同時に、第2係合部36が第1係合部22へ係合する。このようにして容器へオーバーキャップ30を嵌合させた状態で出荷する。

【0025】

開封するには、オーバーキャップ30の内筒の雌ネジ34を中栓の雄ネジ15から上方へ螺脱させるべくオーバーキャップを回転させればよく、するとオーバーキャップの嵌合筒35と移行栓の周壁21とは第1、第2係合部23、36を介して連結されているため、移行栓20は注出筒17から上方へ離脱してオーバーキャップ30へ移行する。

【0026】

30

すなわち移行栓20は中栓10から離脱してオーバーキャップ30と一体的に連結される。このように移行栓20が中栓の注出筒17から離脱してオーバーキャップ30へ移行するのは、移行栓20と中栓の注出筒17との嵌合力よりもオーバーキャップ30と移行栓20との第1、第2係合部22、36を介しての係合力の方が強いからである。

【0027】

容器内の液体を注出した後、容器を閉蓋するには、オーバーキャップ30を容器へ嵌合させればよく、するとオーバーキャップと一体的に連結された移行栓20が注出筒17内へ嵌合されることで中栓の注出筒17が閉塞される。すなわち移行栓20は打栓時の液体の跳ね出し防止用の閉塞部材としての役割とともに、中栓の注出筒の不使用時における閉塞栓としての役割を兼用する。

40

【0028】

図2は第2の実施形態を示す。第1実施形態ではオーバーキャップ30の嵌合筒42が移行栓の周壁21内へ嵌合されているが、本実施形態ではオーバーキャップ30の嵌合筒が移行栓20の外向きフランジ40の外周面へ嵌合されている点で相違する。

【0029】

すなわち、移行栓20の外向きフランジ40の外周面には第1係合部41としての係合突部が周設されており、他方、オーバーキャップの嵌合筒42下部内面には第2係合部43としての係合突部が周設されていて、オーバーキャップの係合突部が移行栓の係合突部下面へ係合している。

【0030】

50

かかる構成であるから、開封のために、オーバーキャップ 30 を回動させると、第 1 実施形態と同様に移行栓 20 が中栓の注出筒 17 から拔出してオーバーキャップ 30 へ移行する。その他の構成は第 1 実施形態と同一であるから、説明を省略する。

【0031】

図 3 は第 3 の実施形態を示す。101 は容器で、胴部 102 の上端部外面には上向き段部 103 を介して雄ネジ部 104 が形成されている。雄ネジ部 104 の上端には肩部 105 を介して口頸部 106 が起立している。口頸部 106 外面には第 1 突条 107 が周設されており、また口頸部 106 上端部外面には第 2 突条 108 が周設されている。

【0032】

110 は中栓で、第 2 突条 108 へ嵌合させた外筒 111 下端内面には嵌合部 112 が周設されており、嵌合部 112 は第 2 突条 108 下面へ当接している。

10

【0033】

外筒 111 上端には内向きフランジ 113 が付設されており、内向きフランジ 113 の内外中間部から垂下する内筒 114 が口頸部 106 上端部内面へ嵌合されており、また内向きフランジ 113 内周から注出口を構成する注出筒 115 が起立している。注出筒 115 上部の中間部は縮径されて縮径部 116 に形成されており、縮径部 116 よりも下方の注出筒 115 部分外面に第 1 嵌合部 117 が周設されている。

【0034】

120 は移行栓で、注出筒 115 の上部外面へ嵌合させた有頂周壁 121 下端内面に第 2 嵌合部 122 が周設されており、第 2 嵌合部 122 は第 1 嵌合部 117 下面へ係合されている。また周壁 121 上部外面には第 3 嵌合部 123 が周設されている。

20

【0035】

130 はオーバーキャップで、天面 131 の周縁部から外周壁 132 を垂下して、外周壁 132 の下端部内面に形成された雌ネジ部 133 を雄ネジ部 104 へ螺合させている。また天面 131 の中央部から嵌合筒 134 が移行栓 120 の周壁 121 外面へ嵌合されている。嵌合筒 134 の下端部内面には第 4 嵌合部 135 が周設されていて、第 4 嵌合部 135 は第 3 嵌合部 123 下面へ係合されている。

【0036】

かかる構成であるから、開封のために、オーバーキャップ 130 を回動させると、オーバーキャップ 130 の嵌合筒 134 と移行栓 120 との嵌合力の方が移行栓 120 と注出筒 115 との嵌合力よりも大であるから、第 1 実施形態と同様に移行栓 120 が中栓の注出筒 115 から拔出してオーバーキャップ 130 へ移行する。

30

【0037】

次に、上記構成からなる容器の製造方法について説明する。

まず、内容物が充填された容器の口頸部 5 へ中栓 10 を打栓する前に、中栓の注出筒 17 へ移行栓 20 を嵌合させる(第 1 工程)。続いて、移行栓 20 を嵌合させた中栓 10 を容器の口頸部 5 へ打栓する(第 2 工程)。次いで、オーバーキャップ 30 を容器へ嵌合させることで、オーバーキャップから垂下する嵌合筒 35 (42) を移行栓 20 へ嵌合させる(第 3 工程)。

【図面の簡単な説明】

40

【0038】

【図 1】本発明に係る蓋付き容器の半断面図である。

【図 2】第 2 実施形態を示す図 1 相当図である。

【図 3】第 3 実施形態を示す要部断面図である。

【図 4】(1)従来の栓付き中栓の半断面図である。(2)図 3(1)の中栓を容器に装着した状態を示す半断面図である。

【符号の説明】

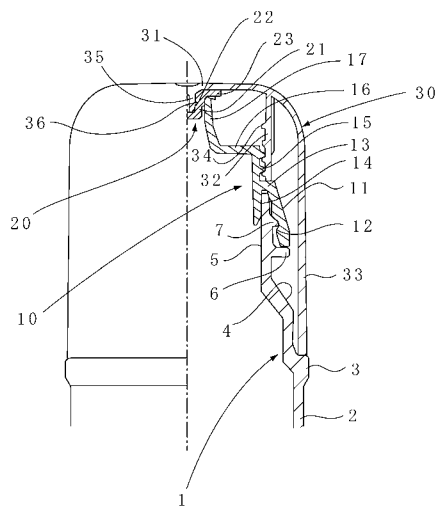
【0039】

- 1 容器
- 5 口頸部

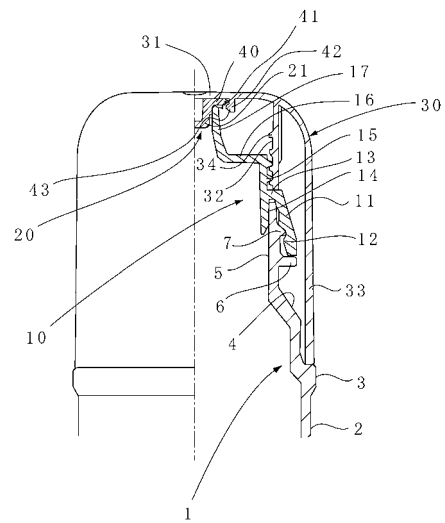
50

- 10 中栓
- 17 注出筒
- 20 移行栓
- 21 周壁
- 22、41 第1係合部
- 30 オーバーキャップ
- 31 天面
- 35、42 嵌合筒
- 36、43 第2係合部

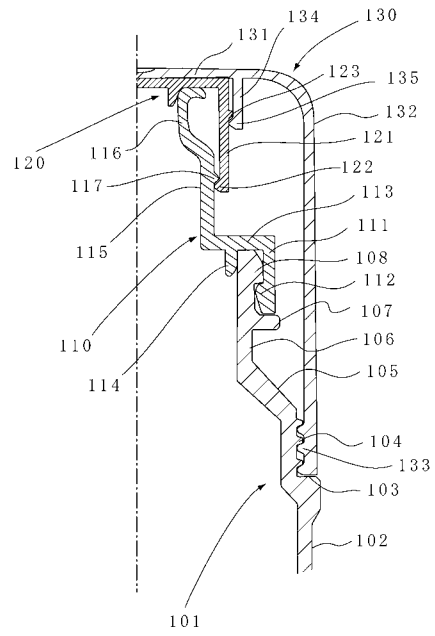
【図1】



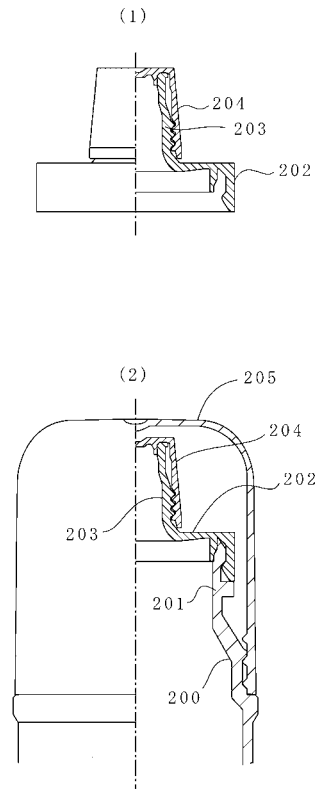
【図2】



【図 3】



【図 4】



フロントページの続き

- (56)参考文献 国際公開第2007/126062 (WO, A1)
米国特許出願公開第2005/0199655 (US, A1)
特開2002-347816 (JP, A)
実開平02-093250 (JP, U)
米国特許第03556332 (US, A)
特開2007-145370 (JP, A)

- (58)調査した分野(Int.Cl., DB名)
B65D 35/44-35/54
B65D 39/00-55/16